

インタビュー

考古学者・新潟県立歴史博物館館長
国学院大学教授

小林達雄さんに聞く



小林達雄（こばやし たつお）さん

長岡市出身、県立歴史博物館々長。国学院大学院卒、都教育庁、文化庁文化財調査官を経て、七八年同大助教授、八五年同大教授。米ウイスコンシン大、英ケンブリッジ大などで研究活動。著書は「縄文土器の研究」など多数。優れた考古学上の業績に贈られる浜田青陵賞を受賞。

県立歴史博物館は、長岡市関原町の雪深い丘の上に建っていました。わたくしたちは一月下旬、館長室に小林さんを訪ね、考古学と越後・佐渡などについてお聞きしました。ちょうど「越後、佐渡の民話」展が開かれていて、耳で聴く民話を視覚や触覚も使って鑑賞できるように工夫されていました。

縄文時代の研究者として第一人者である先生は、すぐ越後・佐渡の縄文時代から話してくださいました。

（聞き手、本田敏彦、吉田武雄）

一、一國のような新潟は、縄文時代から

—— 新潟県の縄文時代の特徴は何ですか。

鈴木牧之『北越雪譜』や柳田国男『遠野物語』などのせいもあって、雪国は雪の害が強調されたきらいがあります。雪害はそれほど問題ではなく、むしろ雪と対話しながら、雪を利用して生活を成り立たせていた面が何倍も大きいのです。縄文時代から越後・佐渡は人が住みやすい地でした。その時代から今の行政区とほぼ同じ地域を一つの文化圏としていました。「おらがくに」を縄文時代までさかのぼれるのは誇れることです。いま開催中の「越後、佐渡の民話」展も雪国の冬の暮らしを再評価する意図をもち、それにふさわしい展示にしました。

越後特有の個性は、縄文の中期（約七〇〇〇年前）に大いに発揮されています。この時代、全国的に活気づいたのですが、その証拠は縄文遺跡数が断然多くなることです。人口はそれに比例的に増加したでしょう。火炎土器第一号は、このすぐ近くの馬高遺跡から発見されました。あの形は、越後独自の主張を表現していると言えます。岡本太郎画伯が、「叫びたくなるすこ

さ」と感動した造形美で、今もその芸術性は生きています。

火炎土器は、北は村上から西は糸魚川まで、山形や富山にはなく、津南を越えることはありません。十日町の笹山遺跡からは十数組の火炎土器が出土し、国宝に指定されました。越後の文化財のシンボリックな存在です。ちなみに縄文時代の国宝は、他には長野に一つあるだけです。

二、火炎土器の造形が意味するもの

—— あの力強さは、何を示しているのですか。

火炎土器の造形美は、集団的な創造力が生み出したものです。現代の芸術家が、個人の感性で創造するのとは違います。火炎土器第一号は、新潟国体（一九六四年）の聖火台にデザインされたので著名ですが、物理的には不安定なのに、造形としては安定しています。使い勝手は、左右対称の弥生土器より劣るでしょう。でもシンメトリの機能美を超えた力強さがあり、飽きません。

この部屋は、弥生時代以降の機能を重視した建築で個性がありません。館長室はこのくらい大きさがあ

ればいいという一般的な尺度で作られたものです。縄文土器は、模様と本体が切り離せなく、それぞれに個性があります。現在の芸術家が、機能美を超えたデザインを求めて縄文土器と対決しているのは、興味がありませんし、二一世紀に適った試みでしょう。

他の多くの博物館では、縄文時代はプロローグ的に扱われていますが、以上のような考えに立って、この博物館では展示面積の四〇％を縄文時代に当てており、それが、ひとつの大きな特徴です。

三、「石器ねつ造」からまなぶこと

——「石器ねつ造」はなぜ起きたのですか。

藤村新一氏（元東北旧石器文化研究所副理事長）のねつ造事件は、あってはならないことで、氏の業績を評価した私も心を痛めています。学問の世界だけでなくこれに類したことはあり得るのです。じつは、ねつ造事件は世界的にみても、いくつもありません。現在も、将来もあり得ると冷静に見てほしいのです。

藤村新一氏の場合は、魔がさしたと思います。彼は大学等で考古学の訓練を受けた人ではありません。民間の考古学の一研究者でした。いまは五〇歳前後です

が、若いときに東北歴史資料館（現在は東北歴史博物館）へ、「こんなものが出土した」と見てもらいにいったことから始まったようです。そして「すごいものを発見した」と学者から誉められて、また発見↓称賛↓発見↓称賛のサイクルに乗って、後戻りできなくなつたのです。それに関わつた考古学者の責任は重いといえます。もっと早く気付くべきでした。彼の一つの発見ごとに、原人の存在が一〇万年ずつも遡るといふようなことは冷静に考えれば、あり得ないことでした。その意味で私も含めて専門家集団こそ反省しなければなりません。さらに、今の社会的風潮がそれに輪をかけて、ねつ造を生み出させました。日本人の教育レベルが高いから、考古学世界の発見にも多くの人が敏感に反応します。それにジャーナリズムが敏速に伝える、という具合に複合的に、藤村新一氏の個人的弱点も絡んで起きた事件です。

本人が認めたねつ造の二件だけでなく、彼が関わつた発掘等は再検討されるのは当然です。私も「秩父原人」の検討委員の一人として、これからさらに厳密に研究していく予定です。

考古学会として藤村新一氏のねつ造事件が、なぜ起

きたのか多面的に分析するのはいうまでもありません。例えば、遺跡発掘の経費の捻出、遺跡や出土品保存の問題等々が、どのように関わっていたかなどです。またこの事件を社会心理学的にも追及してみたい、と思います。

四、考古学は学際的な学問、縄文の目で 見ると

——考古学は学際的な学問という特徴は？また縄文文化の目で見ると現代の問題は何かですか。

遺跡・出土品の年代を測定するには、放射性炭素の半減期やガラス質に残された放射性ウラニウム自家分裂のキズの数などによって高い精度で年代決定ができるし、地球自体が大きな磁石とみていいから古地磁気を測定する方法などで応用され、地球物理学、原子物理学、古生物学、などなど多くの学問の成果を使わせてもらいます。

考古学に限らないが、学問に博物館的な系と専門分化の系の二つの方向があって、後者は特に学際的な分野が必要です。考古学も関連学問と両輪の如く、相まって発展してきましたし、これからもそうでしょう。

自然科学のみならず、いわば認識考古学といったような分野も生まれています。土器の皿・鉢といった形態の研究だけでなく当時の人々の時間認識や空間認識、さらに自我意識の発生にいたるまで研究が及びつつあります。

縄文人も学習と経験のうえに自然を自分たちに都合のいい空間に作り変えました。その次の弥生時代以降（約二四〇〇年前）、人はますます自然と対立してそれを変革してきました。しかしその自然変革の流れが、メダシといえなくなっているのが現在です。グローバルな環境汚染、国内もダイオキシン、PCB、長良川可動堰、諫早湾締切など、歯止めなしの例が多数あります。

そこで生態学的な調和をもった生き方が、問い直されています。日本の稲作はそれでも里山と共生してきましたから、環境汚染は少ないほうでした。近年特にきわめて低次元の経済的効率性を追及した結果、自然が存亡の危機を迎えていると、いえます。

それらの抱えている問題を縄文の目でみようという気運が盛んになってきました。ただし「縄文に帰れ」ではありません。縄文を世界四大文明と比肩する第5



▲ 火焰型土器(長岡市馬高遺跡出土、高さ32.5cm) 火焰型土器の技法は、縄文時代の中期に信濃川の中流域でもっとも発達し、東日本の各地に伝わった。実用性をそこなうほど豪華な造形と文様に人びとはどんな関心をこめたのだろうか。国重文。

の文明などというのは誤りで、ひいきの引き倒しです。縄文文化は文明に至らなかったのです。弥生の農耕生活から文明に入ります。産業革命以降、とりわけ自然に化学的な干渉をやってきたことが環境ホルモンの例に見られるように深刻な事態を生んでいます。

いま置かれている自分たちを見る鏡が縄文文化であるといいたいです。そこから二一世紀に、私たちはどのように生きていけば良いかのヒントを多く得ることができるとでしょう。



縄文人の世界(県立歴史博物館のパンフレットから)